

〈論文〉

ウィンドラッシュ世代の書き残し作業 —Sam Selvonの「Moses 三部作」における移民、差別、価値観の変遷

濱 奈々恵

要約

本稿はトリニダードからイングランドへ移住したSam Selvon(1923-94)の作品の中から、Moses Aloettaを主人公とする*The Lonely Londoners* (1956)、*Moses Ascending* (1975)、*Moses Migrating* (1983)の「Moses 三部作」を選び、1950年前後に移住したいわゆる「ウィンドラッシュ世代」(Windrush Generation)が直面した差別や偏見、そして価値観の変遷を考察するものである。彼らのような移民は〈白人と黒人〉という西洋的な価値観の犠牲になることが多く、日常生活や就職において差別や偏見から逃れられなかった。だがこの二項対立は*The Lonely Londoners*から*Moses Ascending*にかけて変化し、後者の作品ではコミュニティにおける対立の構造が人種、民族、世代にもおよんで複雑化している。*Moses Migrating*では人々の価値観がさらに多様化し、Mosesがロンドンから故郷のトリニダードに持ち帰った価値観は彼らの価値観とことごとく合わない。本稿では二転三転する〈白人と黒人〉の権力構造、「イングリッシュネス」の追求と肩透かし、そして過去との断絶や過去を書き残す作業などについても触れながら、「Moses 三部作」を考察していく。

1. 序論

1948年5月24日、一隻の船がカリブ海のジャマイカからイングランドのティルベリー(Tilbury)に向けて出帆した。船の名前はEmpire Windrushで、乗客は492名。一人あたり28ポンド10シリングという運賃は、当時の経済状況から判断すると、決して安くはないはずだ¹。そのため、彼らは移住せざるを得ないほどに困窮していた、というよりもむしろ、比較的恵まれていたといった方が確かかもしれない。実際、当時のニュース映像で確認する限り、彼らの表情は概して明るく、しかも背広を着用している²。彼らは「移民」という言葉が想起させがちな悲壮感とは無縁で、まるで旅行を楽しんでいるかのような印象すら抱かせる。この船は1954年3月に、船内での火災が原因で地中海に沈没している。わずか6年の運航期間だった。

本稿では、1950年前後にカリブ海からイングランドへ移住したいわゆる「ウィンドラッシュ世代」(Windrush Generation)³の一人、Samuel Dickson Selvon (1923-94、作家名はSam Selvon)と彼の作品について論じていく。Selvonはトリニダードで生まれた作家で、父親はインド系移民、母親はスコットランド人とインド人の混血であった。Selvonは1950年にロンドンに移住してから本格的に執筆を始め、1978年にカナダへ移住。1994年、故郷に帰る道中に、気管支肺炎による呼吸不全で死亡している。Selvon自身、「ウィンド

ラッシュ世代」の一人としてロンドンを経験したということもあって、彼が描く登場人物たちには彼自身の経験が色濃く反映されている。そこで本稿では Selvon の分身ともいえる Moses Aloetta が主人公の三部作、*The Lonely Londoners* (1956)、*Moses Ascending* (1975)、*Moses Migrating* (1983) を中心にして、移民が直面した問題について考察していく。

20 世紀後半からポストコロニアル理論が盛んになり、それに伴って「第三世界」への注目や文学的キャノンの修正、帝国主義への抵抗を読み取る研究が増えている。国内でも『ポストコロニアル文学の現在』や『カリブ文学研究入門』といった研究書が登場し、これらの網羅的な研究のおかげで「英文学」を見直し、従来とは違う視点から研究する道標が得られた。ただ、前者の研究書には Selvon に関する記述がなく、後者には本稿で挙げた「Moses 三部作」が出てこない。国外では、1980 年前後から Selvon の研究が本格化した印象があり、近年では Edward Said や Homi Bhabha らの理論を援用した研究が増えている。しかしその議論は「Moses 三部作」の一作品、あるいは二作品に限られている。「Moses 三部作」は、Moses のロンドン移住から一時帰国までを扱った作品であり、社会や価値観の変遷を抜きにして語ることはできない。「Moses 三部作」に通底するテーマを一貫した観点から論じることで、研究上の貢献が果たせる余地は残されている。

そこで本稿では、「Moses 三部作」を出版順に概観しながら、移民が避けて通れなかった社会問題について論じていく。その最たる問題は差別と偏見だが、一口に「差別・偏見」と言っても、それは *The Lonely Londoners* と *Moses Ascending* とでは様子が異なっている。前者の舞台は 1950 年代、一方、後者の舞台は 1960 年代で、10 年という時間の経過とともにコミュニティの人種、民族、世代は複雑化し、その価値観もまた多様化している。ロンドンで 20 年以上生活した Moses が故郷に帰る *Moses Migrating* でも人々の価値観は一様でなく、彼が持ち帰った価値観は必ずしも故郷の価値観と一致しない。西洋化された価値体系に長らく身を浸した Moses は、西洋の物差しで故郷の価値観を図り、そのたびに失敗する。また〈白人と黒人〉という二項対立は、*The Lonely Londoners* と *Moses Ascending* で頻繁に確認できるが、それは二転三転した挙句、*Moses Migrating* で崩壊している。そもそも Selvon が使用し、それによって存在感を示したクレオール英語 (Creolized English) も、単純な二項対立からの脱却と解釈できる。Selvon は 1977 年に行われたインタビューで、作品中の使用言語についてこう述べている。“I had difficulty starting the novel in straight English. . . I had written the narrative in English and most of the dialogues in dialect. Then I started both narrative and dialogue in dialect and the novel just shot along.”⁴ Selvon が戦略的に「現地の言葉」を多用したことで登場人物が魅力を帯び、エピソードの一つ一つに面白みが増した。この選択によって彼の作品は高く評価され、作家として「英文学」に爪あとを残したのである。本稿では、本文からの引用は全て原文を使用し、移民に付随しがちだった社会問題や価値観の変遷・崩壊を考察していく。

2. 移民たちの葛藤と格闘—*The Lonely Londoners* (1956)

2-1. 人種差別と失業

The Lonely Londoners は1950年代を舞台にした作品で、主人公 Moses がトリニダードからイングランドへやってきて、およそ10年が経過した頃の話である。作品の冒頭で Moses はウォータールー駅に向かっており、そこで同郷の Henry Oliver (通称 Galahad) を迎えることになっている。同郷とはいえ二人に面識はなく、それでも移民の世話をするのが Moses の慣例行事になっている。しかし Moses 自身、ロンドンで10年を過ごしてもまだ生活に安定を得られておらず、そのような身でベテランとして移民の世話をする立場にジレンマを抱えている。

本稿の序論で挙げた当時のニュース映像には、“London is the place for me / London this lovely city / You can go to France or America, India, Asia or Australia / But you must come back to London city” と歌う青年が登場する。この青年は Lord Kitchener (1922-2000) で、1948年に Empire Windrush でイングランドに上陸。マンチェスターでナイトクラブを経営し、カリブ海からの移民に熱烈な支持を得た歌手である⁵。Kitchener はこの歌の中で、“I am glad to know my mother country” と歌いながら、イングランド、特にロンドンに降り立った喜びを表現する。当時、イングランド政府は植民地からの移民を認める英国国籍法 (British Nationality Act, 1948) を制定した直後であり、ある種、国を挙げて移民を歓迎していた。当然、植民地出身者は自分たちの境遇をかなり理解していたふしがあり、これは *The Lonely Londoners* でも描かれている。Moses は到着したばかりの Galahad に向かって、レストランで働くあるポーランド人の境遇を引き合いに出す。Moses は、“we is British subjects and he is only a foreigner, we have more right than any people from the damn continent to live and work in this country, and enjoy what this country have, because is we who bleed to make this country prosperous.”⁶ と述べて、「単なる外国人」と植民地出身者をはっきりと切り離す。彼はどんな形であれ、植民地出身者はイングランドの繁栄に寄与している以上、社会的な権利が保障されているはずだと主張する。

ところが実際には、彼らを取り巻く環境はかなり厳しい。例えば、Galahad は職探しに出かけた先で理不尽な目に遭う。彼はトリニダードで電気技師として働いた経験があり、その技術を活かしたいと考えている。だが彼がその仕事にありつけることはない。どうやら失業者登録のカードに“J-A, Col.” (LL 28) と記載されたようで、この表記がつけられた移民は雇い主の意向で不採用になることが多い。これは「ジャマイカ出身、有色人種 (Jamaica, coloured)」の意味で、これをつけば個人が持つ資格や技術は全く考慮されなくなる。運よく職にありつけたとしても、求人広告に載っていた内容とは全く異なる仕事を押し付けられ、しかも就業時間は白人が働かない夜中に限られる。Moses は、“they keeping all the soft clerical jobs for them white fellars.” (LL 35) と見抜いているが、その事実を知ったところで打つ手はない。

露骨な人種差別はこれだけにとどまらない。植民地出身者にとって白人の恋人を持つこ

とは、何よりのステータスシンボルであり、女性たちもそのことを理解している。そのため彼女たちの中には、彼らを利用して最新の映画を見たり、レストランで食事をしたりする人もいる。たとえ恋愛から結婚に至るチャンスがあろうとも、家族の理解を得るのは難しく、「縮れ毛の子孫などいらぬ」（LL 51）と罵声を浴びせられて破談になることもあった。結婚したとしても生まれた子どもたちがいじめの対象になることもあり（LL 126）、彼らの悲惨な経験が本作品で明らかになる。Galahad の場合、ようやく白人の女性（Daisy）とデートする機会に恵まれるが、その道中で見知らぬ少女に、“Mummy, look at that black man!”（LL 76）と指をさされ、周囲から心無い視線を浴びる。トイレで白人男性に出くわせば、“how these black bastards have the lavatory dirty”（LL 77）となじられ、空き部屋の家主に会いに行き、握手をしようとドアのすき間に手を差し込めば、「もう部屋はない」と嘘をつかれる（LL 77）。Galahad は自分の手を見つめて、“Why the hell you can't be blue, or red or green, if you can't be white?”（LL 77）と嘆き悲しみ、イングランドにおける自分の立ち位置を嫌というほどに思い知らされる。政府の「表向きの歓迎」とは裏腹に、社会の隅々では移民に対する偏見は後をたたなかった。“the English people believe that everyone who come from the West Indies come from Jamaica.”（LL 7）や、“So don't expect that they will treat you like anybody special – to them you will be just another one of them black Jamaicans who coming to London thinking that the streets paved with gold.”（LL 22）など、民族性や個人の壁を取り払い、全ての移民を「ジャマイカ人」としてくくるこの地において、移民が「個人」として認識されるのはかなり難しい。

2-2. 「イングリッシュネス」の追求

ロンドンに馴染む方法を模索する移民たちは、精一杯の「イングリッシュネス」を取り入れることで事態を改善しようとする。例えば Galahad は、誰かと待ち合わせをするときには Charing Cross 駅や Oxford 通りなど、わざわざ聞こえよがしに固有名詞を叫ぶという優越コンプレックスをもっている（LL 71）。Galahad 以外にも「イングリッシュネス」にこだわる登場人物はいるが、中でも Harris のそれはずば抜けている。Harris は物腰の丁寧な、常に紳士気取りの男性である。土曜日になると野外ダンスパーティー（fete）を主催し、移民と白人女性が交流できる場を提供する。この常連が Five Past Twelve（通称 Five）という男なのだが、女好きで素行の悪い彼の登場はいつも Harris の頭を悩ませる。“distinguished people”（LL 105）が集まるパーティーで一目置かれたい Harris は、マリファナ片手にうろつきまわる Five に説教をする。

“Another thing,” Harris say, drinking the lemonade and forgetting to speak proper English for a minute, “is when the fete finish and the band playing ‘God Save The Queen’, some of you have a habit of walking about as if the fete still going on, and you, Five, the last time you come to one of my dances you was even jocking waist

when everybody else was standing at attention. Now it have decent people here tonight, and if you don't get on respectable it will be a bad reflection not only on me but on all the boys, and you know how things hard already in Brit'n. The English people will say we are still uncivilised and don't know how to behave properly. So please boys, do me a favour, and when the band play 'God Save The Queen', stand up to attention." (LL 116)

Harris は意識的に「きちんとした英語」を話すことで、「上品な英国人」に認められようと努力している。野外パーティの最後に、お開きの合図として 'God Save The Queen' を流すこと、その最中は静止すること、それができなければ移民全員が「洗練されていない人」として蔑視されることなどに触れて、西洋的な価値観に従うよう仲間にも強要する。

Harris にとって厄介な存在は、Five だけではない。Harris の友人 Tolroy についてきた Bessy もまたこの日の宿敵であった。Bessy は Tolroy の伯母で、Tolroy の母や姉一家がジャマイカからイングランドに移り住むときに、勝手についてきた人である。彼女は Tolroy らが外で働いている間、家の掃除や食事の準備など、家事を一手に引き受けている。Bessy は感情に従って行動するタイプで、常に喜びを大きな体で表現する。Harris のパーティに乱入した日もまさにそうで、ジャマイカにいる時から知り合いだった Harris と再会できた喜びから、大きなお尻をふってダンスに興じる。「イングリッシュネス」に重きを置く Harris にとって、Bessy の行動は興を削ぐものであるが、実は誰よりも早くイングランド社会に受け入れられるのはこの Bessy である。彼女は英国人からも Tanty Bessy (Bessy おばさん) と呼ばれて親しまれ (LL 65)、ロンドンで経済的な戦力になっていない彼女がいち早くロンドンで認められるのだ。

「イングリッシュネス」にこだわる Harris とは裏腹に、「イングリッシュネス」に欠けている点こそが魅力に映る場合もある。例えば Moses はかつて、“the cruder you are the more the girls like you you can't put on any English accent for them or play ladedda or tell them you studying medicine in Oxford” (LL 100) と言われて、ある女性に気に入られたことを思い出す。Harris は英国風に同化されること (Anglicization) にこだわるが、皮肉なことに、彼女たちにとって英国風に染まっていない男性の方が余計に魅力的なのだ。それに気づけないほどに感化されている Harris は、読みもしない *The Times* を目につきやすい形でズボンのポケットに突っ込んで (LL 137)、「イングリッシュネス」に同化しているらしき姿をここぞとばかりに見せつける。Harris の態度の背景にあるのは、＜白人と黒人＞という二項対立における劣等感であり、彼は自分たちを劣った側に置いてそこから抜け出そうと必死になっている。だが Five や Bessy のように、＜白人と黒人＞という枠組みにこだわらない人たちが意外と受け入れられやすい。パーティというある種カーニバルにも似た雰囲気の中で、Harris は白人による抑圧ではなく、白人を頂点とする彼の価値観で自分を押しえつけ、自分で築き上げた「イングリッシュネス」の虚像に振り回されてしまうのである。

2-3. 書き残しの作業

人種差別、失業、「イングリッシュネス」へのこだわりと失敗など、一見すると *The Lonely Londoners* は、カリブ出身の移民がロンドンに移り、そこで苦労を重ねる「かわいそうな話」という評価を得そうだ。しかし、それは全くの誤解で、むしろ彼らにはあまり悲壮感が漂わない。例えば、本作品の冒頭で Moses が迎え入れる Galahad は真冬のロンドンに夏のスーツで登場し (LL 13-14)、持ち物はポケットに入れた歯ブラシ一本 (LL 14)。持参金はわずか5ポンドで、そのうち2ポンドをすでにギャンブルで浪費している (LL 15)。ロンドンに慣れたふりをして道に迷い (LL 19)、冬に暑がり夏に寒がる (LL 71) という季節感のなさも滑稽である。失業してから食べる物に困ると、公園に出かけて鳩の鳴きまねをし、捕まえた鳩を持ち帰って Moses と食べる (LL 120)。他にも Captain (通称 Cap) というナイジェリア出身の男もいるが、彼は法律を学ぶためにロンドンに来たはずが、女と煙草で散財して父親に勘当されている (LL 30)。人肌恋しいある夜、大柄の女性に「ボンソワ」と声をかけられてついて行ったところ、その人は売春婦どころか実は男だったというオチがつく。以来、Cap はすれ違う仲間たちから「ボンソワ」と呼ばれ続けるという、通称「ボンソワ事件」を起こす (LL 39-40)。彼も Galahad 同様に食べる物に困るが、部屋がアパートの最上階にあったため、屋根にパン屑を撒いてカモメを捕まえる作戦に出る。この作戦がうまくいった結果、ロンドンからカモメが消えたこと噂される事態にまで発展する。怪しんだ大家は Cap を追い出すが、Cap は別のアパートの最上階に移り住み、そこでもせっせとパン屑を撒く。しかしそのアパートは海から遠い場所にあったので、カモメは一羽もやってこない (LL 130-33)。

この滑稽なプロットは *The Lonely Londoners*、あるいは Sam Selvon の特徴だといえればそれまでだが、本作品の中で Moses の口を借りて Selvon の理論が披露される。本作品の最後で、Moses はテムズ川のほとりで一人立ちつくしている。そこで彼は、白人の波にもまれる黒人が緊張した不安げな表情を垣間見せる姿を想像する。「何と行って表現したらいいのかわからないが」と前置きしながらも、Moses は「自分には感情がある」と考えなおして、こう続ける。“As if the boys laughing, but they only laughing because they afraid to cry, they only laughing because to think so much about everything would be a big calamity—like how he here now, the thoughts so heavy like he unable to move his body.” (LL 139) 後に物書きとして活動する Moses は、「怖さを隠すために笑え、物事を深刻に考えずに笑え」というスタンスを持ち、悩みを抱える仲間に対して一貫して何度も、“all right, take it easy.” (LL 18) を繰り返す。

自分たちの境遇や過去を書き残すことは、特に「第三世界」と関わりのある作家にとって大きな課題である。例えば、*The Long Song* (2010) でマン・ブッカー賞の最終候補に残った Andrea Levy (1956-) はその一人に挙げられるだろう。彼女の両親は1948年に Empire Windrush でジャマイカからイングランドへ渡っており、Levy はロンドンで生まれ育った「第二世代」にあたる。*The Long Song* は Levy の祖母と母の物語をモデルとし、語り手 Thomas は “I explained to my dear mama, once spoken these precious words of

hers would be lost to all but my ears.”⁷と話し、口伝えではなく文字化することで物語が広く、長く読まれることを目指す。物語は祖母が白人入植者に凌辱されたこと、プランテーションの小屋で出産したこと、黒人奴隷の悲惨な生活や黒人奴隷の反乱などにおよび、「悲惨な記録」としての色を帯びて行く。Selvon も Moses の存在を借りて書き残す作業に着手しているわけだが、彼の場合は自分たちの記録を「悲惨な記録」に仕立てることがない。Selvon の作品にある面白さの背景には、この「悲壮感の排除」が関わっており、自分たちの存在や過去を「悲劇」の鋳型にはめることがない。

3. 反転した権力関係と白人の利用価値—Moses Ascending (1975)

3-1. 多様化する移民と「第二世代」の台頭

前作からおおよそ10年後の1960年代、Moses は Tolroy が所有していたアパートを購入し、その家主になっている。Moses はアパートの最上階に住み、タイトルが示す通り、ロンドンで少し社会的地位を上げて、白人を含む周囲の人に Sir と呼ばれている。10年の時間経過とともに変わったのは Moses に限られず、ロンドンの雰囲気もかなり変わっている。具体的に一つ例を挙げれば、それは人種や民族が以前に比べて多様化している点である。例えば、Moses が所有するアパートの住民を見てみると、イングランド出身の Bob と Brenda、バルバドス出身の Flo、キプロス出身の Alfonso、それにアフリカ人の Ojo、オーストラリア人の Macpherson、そしてパキスタン人の Farouk など、住民の構成要素に統一性がない。住民の出自がバラバラである以上、各々が持つ価値観が多様化するのも当然である。Moses は家主として彼らを統率しようと部屋を訪問して回るが、誰ひとりとして彼の呼びかけに応じない。Moses は、“Long ago if the landlord come in my room I jump to attention and salute. It look as if I should of been saluting my boy instead.”⁸と嘆き、彼らの不遜な態度に頭を悩ます。“Chippendale furniture”、“Wedgwood crockery”、“Axeminister carpets” (sic)、“Woolworths wallpaper” (MA 43) といった「イングリッシュネス」で彩った自分の城が、勝手に作り変えられているのではないかと不安になり、彼は躍起になって部屋の確認にまわる。

The Lonely Londoners では差別の問題が<白人と黒人>に限られていたが、本作品ではそれが民族にも及んでいる。例えば本作品に出てくるパキスタン人の Faizull Farouk は、Moses が所有するアパートの敷地内に羊を連れてくる。産業廃棄物の中にポツンとたたずむ羊の姿は異様で、「都市」と「田舎」を体現する二つの象徴的な記号は全く絡み合わない。Farouk は「イングリッシュネス」に満ちた Moses の領域内で、この羊を殺してさばく。これは同じアパートに住むイングランド人 Bob の目には“barbaric custom” (MA 65) として映り、“This is a civilized country” (MA 75) と言って激怒して、動物愛護協会に連絡するべきだと声を荒げる。一方、Farouk にとってそれは伝統的な宗教儀式の一環であり、また Moses にとっては異なる文化を知る絶好の研究資料となり、三者三様の異なる反応を読み取ることができる。また Farouk はアジアからの不法移民を斡旋してこのアパートで匿っており、それを知った Moses はそのアジア人一人ひとりから 20 ポンドを徴収して

住まわせる。ところが、“There is no god but *the* god, and Mohammed is his prophet.”(MA 91)を必ず唱えるパキスタン人のPakiが、「もうこれ以上、あいつらと一緒にいるのは嫌だ」と別のアジア人に対する不満を爆発させる。ここでMosesは、“I know that English people so stupid that the whole lot of Orientals and Blacks is the same kettle of fish as far as they are concerned.”(MA 67)と反省の弁を述べ、文化の違いに思いが至らなかったことを認める。つまり、*The Lonely Londoners*に比べて、本作品では西洋的価値観に根差した単純な二項対立では収まり切れない構造が顕在化しているのである。その結果、「その他」や「周縁」に大別されてきたいわゆるマイノリティが多様化し、そのマイノリティの中にもまた価値観のズレや格付けが存在しているのだ。

本作品の特徴は、人種や民族が複雑化しているという点に限られない。二つ目の特徴が「ウィンドラッシュ世代」の中の「第二世代」の出現である。本作品での代表格Brenda Palmerはイングランド人として登場するが、実は彼女の両親はジャマイカ生まれでイングランドに移民している。つまりBrendaの両親は「第一世代」で、Brendaはイングランドで生まれた「第二世代」となる。だが、彼女は“I was born and educated in this country, but I know where I stand.”(MA 26)と発言して、イングランドに同化していない立場を明確にする。そのため、ひとくくりに移民とは言ってもBrendaの両親やMosesのようなイングランドに移り住んだ「第一世代」と、Brendaのようにイングランドで生まれ育った「第二世代」が持つ価値観は全く異なっており、また「第二世代」の中にも様々な立場の人たちが存在している。興味深いことに、「第一世代」と「第二世代」では、イングランドにおける振る舞いに大きな違いがある。「第一世代」は故郷から移民してきた人たちであるため、望みをかけた新天地で排除されないようにと、何かにつけて法律や警察に怯え、目立つ行動を取りたがらない。それに対して「第二世代」にとっての故郷はイングランドであるため、彼らの行動は大胆で、傍若無人な振る舞いを繰り返す傾向が高い。BrendaはBlack People's Partyという政治組織の中心人物として活動し、“Black is beautiful”や“Power to the People”を合言葉にして、集会やデモ行進、パンフレットの作成などを行っている。彼女は当時のアメリカで黒人解放闘争を展開していたBlack Panthersとも接点を持ち、代表者を一人イングランドに招いて大きな集会を開く。BrendaはMosesのアパートの地下に住んでいるため、ここが活動拠点になっている。目立つことを嫌うMosesは再三にわたってBrendaを説得するが、居住者としての権利を主張してばかりのBrendaは耳をかそうとしない。

Mosesと同じく「第一世代」であるGalahadは、あるアメリカ人の影響で熱狂的な革命家に身を転じている。彼はBrendaの活動に賛同し、半ば狂信的に彼女の活動を支えている。そのため、Brendaの活動に理解を示さないMosesと対立し、作家として個人の記録(Memoir)に埋没し、社会で起きている問題に目を向けようとしないうちに、“old-timers like you will be just brushed aside”(MA 4)や“living like a anchorite”(MA 57)という言葉を浴びせて断罪する。Mosesはひどく腹を立てるが、黒人の存在を知らしめた「黒人文学」を知らない自分は、“you are still living in the Dark Ages!”(MA 56)と言われ

でも仕方がないと思い、執筆内容の変更を検討し始める。Galahad の叱責により、Moses は自分があるロンドンが 10 年前とは大きく異なっており、人種、民族、世代の三つが複雑化している事実を目の当たりにするのである。

3-2. 黒い肌の Robinson Crusoe と主従関係の逆転

Moses はアパートの家主となったことで、社会的な地位を少し上げている。働く必要が無くなった彼は、白人が寝静まってから仕事に出かける仲間を尻目に、自分は彼らが属するコミュニティから抜け出たのだと感傷に浸る。すでに述べたが、彼のアパートには様々な住民が暮らしているが、中でも特筆すべきは Bob の存在である。最初の登場箇所では Bob は、“my man Friday, a white immigrant name Bob from somewhere in the Midlands, who came to seek his fortune in London” (MA 6) として紹介される。彼は従来のような「白人入植者」として登場せず、イングランド中部からロンドンへの「移民」として描かれる。さらに言えば、Moses は Bob を “my man Friday” と呼び、この後の箇所でも “my au pair” (MA 12) や “my lackey” (MA 41) と形容しながら、二人の間に築き上げた主従関係を読者に見せつける。Selvon は本作品の中で Daniel Defoe や Robinson Crusoe の名を挙げていないが、現代の読者にはこれが *Robinson Crusoe* のパロディであることは明らかであろう。しかもここで Selvon は *Robinson Crusoe* での〈白人と黒人〉の主従関係を、〈黒人と白人〉に反転させて、英文学のキャンノンに手を加えている。

Helen Tiffin によると、1970 年代の西インド諸島では大学の英文科のカリキュラムに、Shakespeare、Spenser、Johnson、Danne、Herbert、Dryden、Pope、Swift、Johnson、Keats、Eliot、Defoe、Fielding、Emily Brontë、Dickens、George Eliot らの作品研究が入っていたようだ⁹。Sam Selvon 自身もインタビューの中で、Wordsworth や Keats を学んでいたと話しており¹⁰、英文学のキャンノンに造詣が深かったことは明らかである。そのため彼が *Robinson Crusoe* の権力関係を意図的に反転させてパロディ化し、それを本作品に取り入れたのは間違いない。

この反転した構図は早くも、*Moses Ascending* の冒頭に出てくる。本作品の冒頭で Bob は酒癖の悪い青年として登場し、これを律するために Moses は、“I try to convert him from the evils of alcohol” (MA 6) と決心して、Bob の改革を試みる。

And whilst I was indoctrinating him, I also learn a lesson myself, which is that Black and White could live in harmony, for he was loyal and true, and never listened to all that shit you hear about black people. Afterwards he tell me he used to believe it, but since coming under my employ he realize that black people is human too.

I decided to teach him the Bible when I could make the time. (MA 6)

Bob は Moses のアパートで “willing worker” として生活し、すぐに黒人流の生活 (“ways

of the Black man”)を身につけて、豆や米を使った料理を覚える (MA 6)。彼は Moses のアパートの住民でありながら、同時に Moses の右腕として働く青年でもある。聖書の読み方やロンドンでの暮らし方を Moses から習い、その関係性は従来の〈白人と黒人〉という構図から逆転している。

ただし「白人」という記号に付随する権力や信用の高さは本作品においても健在で、状況に応じてこの「白人」という属性が利用される。例えば、本作品では黒人解放運動が盛んに行われているが、それに共鳴した Bob はグループの一員として Brenda と活動を共にする。Black Panthers の一員を招いた集会は、Moses の目にはちゃんとしたもの (“the respectable aspects of the meeting”, MA 126) に映るが、結局、駆け付けた警察によって Galahad、Brenda、Black Panthers の代表が逮捕される。Bob はこの時、“it is only because they are black. No whites were captured.” (MA 127) と冷静に状況を判断し、Moses もまた黒人の声を届けるには、白人に付随する権力を利用することが得策だと考える。Black People’s Party が発行する雑誌の創刊号をめぐって、Moses は、“Imagine how democratic it would look. The very first issue of a black paper, and a white face dominating the front page. It would put the opposition off their guard.” (MA 135) と述べて、Bob の人種に備わる権力を利用することに決める。白人に付随する権力はすでに社会的に認められており、そのことは、“Evidence from a white man will carry enormous weight.” (MA 153) からも明らかである。ただし Bob は、自分が必要な時にだけ利用され、それが済めば仲間外れにされることにも気づいている。Selvon は Bob に、“I suspect a spot of discrimination.” (MA 133) と言わせ、Bob が黒人のコミュニティから排斥されるという立場を違えた人種差別を経験させる。

Bob が Black People’s Party の活動に加わるのには、Brenda の影響がかなり大きい。Brenda と Bob は会ったその日に肉体関係を持ち、Bob はその関係性に耽溺している。Bob は再度、Brenda と肉体関係を持ちたいばかりに、Moses から預かった彼の著作物を勝手に Brenda に見せてしまう。Bob に裏切られただけでなく、Bob からお墨付きをもらっていた作品を Brenda にけなされて、Moses は激怒する。彼は Bob のアルバムで見つけた彼の昔の恋人 Jeannie に手紙を送り、Bob と Jeannie をくっつけて彼を自分のテリトリーから排除しようとする。結局、Bob は故郷で Jeannie と再会し、その後、彼女を連れてロンドンに戻ってくる。Moses は Bob、Jeannie、そして Brenda と話すうちに、Bob が「白人流に言えば失読症」 (“He is illiterate, but being as he’s white we say he is suffering from dyslexia.” MA 169) であることを知る。Bob のお墨付きには根拠も権力もなかったことを知り、Moses は自分が白人に付随する権威に依存していたことに気づき、肩を落とす。

これ以降、Moses は Bob に読み書きを教えることとなり、西洋的イデオロギーにありがちな権力構造をひっくり返して、黒人が白人を教育する。それまで、Moses と Bob の二人しかいなかった空間に Jeannie が加わり、Moses は三人の時間を満喫する。“The three of us live in perfect harmony, watching the television together, sharing our meals,

and she and me had great fun teaching Bobbie the alphabet, though he still look at his comic books avidly.” (MA 174) という Moses の内的独白から、彼が人種を超えた調和に理想を見出していたのは明らかだ。イングランド全体がそうならなくとも、Moses が所有するアパートの一室でこの理想が実現し、そこでは規模は小さいながらも人種の壁が取り払われた世界が実現している。

ところが、この理想の構造は Jeannie の誘いに乗った Moses の行動で崩壊する。Moses は家庭的な Jeannie をとても気に入り、いつも何らかの方法で彼女の優しさに応えたいと思っていた。そんなある夜、Bob の留守中に Jeannie は Moses の部屋でシャワーを浴び、Moses に背中を流してほしいと頼む。Moses は彼女の要求通り、浴室に入って彼女の背中を流すが、ちょうどそこに Bob が帰ってきて騒動になる。“Thus are the mighty fallen, empires totter, monarchs dethrone and the walls of Pompeii bite the dust. Humiliated and degraded, I took up abode in Bobbie’s erstwhile room, while he and Jeannie move in to the penthouse. Bobbie did set down some ironclad conditions and would not budge or display the slightest inclination for compromise or compassion, but instead fortified his position by stipulating penalties for defaulting.” (MA 177) この瞬間、Moses が築き上げた地位と名誉は一気に崩壊し、城主 (Moses) と従僕 (Bob) はその立場を逆転させる。

Moses は本作品の最後で、“One final word. It occurs to me that some black power militants might chose to misconstrue my Memoirs for their own purposes, and put the following moral to defame me, to wit: that after the ballad and the episode, it is the white man who ends up Upstairs and the black man who ends up Downstairs.” (MA 184-85) と述べ、自分の著作物が黒人解放運動のために都合よく利用されるのではないかと危惧する。確かにこの構図は彼らの活動を支えるのには格好のものであり、黒人が台頭する社会はそれほど簡単に実現しないというメッセージを読み取るのも可能である。しかし Moses は、Bob と Brenda が不倫関係にあること、Jeannie が Galahad を狙っていることを知っている。Moses はいつの日かこの秘密を暴露して、再び権力関係をひっくり返してやろうと狙う。人種に根差した権力関係は白人 (Bob と Jeannie) と黒人 (Brenda と Galahad) が入り乱れ、複数の男性を相手にする Jeannie と Brenda の肉欲によって全て崩壊してしまう。＜白人と黒人＞の権力関係はその立場を二転三転させ、人種的純粋性 (racial purity) や女性の純潔性などとともに崩壊してしまう。

4. 黒い肌の男 *Britannia—Moses Migrating* (1983)

4-1. 権力構造と社会的地位の揺れ

前作 *Moses Ascending* で二転三転した権力関係は、「Moses 三部作」の三作目である *Moses Migrating* の冒頭で再び確認できる。自分が所有するアパートにいながら間借り人のような生活に身を落とした Moses は、故郷のトリニダードに帰国することを考える。彼は Bob にそのことを話すが、Bob はトリニダードで行われるカーニバルを見たいと話し、Jeannie も Moses にガイド役を頼む。Moses にとっては一大決心にあたる帰国も、二人に

とっては単なる旅行でしかない。Bob が手配した船で、三人はトリニダードへの旅に出る。Moses にあてがわれたのは三等キャビンで、一方の Bob と Jeannie は一等キャビンに乗り込む。Bob は格の違いを見せつけることで、Moses との間にできたばかりの新たな権力関係を維持しようとする。

ところがこの関係は再び崩壊する。Bob は初日に船酔いで倒れ、到着までの数日をベッドの上で過ごすことになる。このまま死ぬのではないかと思われるほどに体が弱り、回復して上陸すれば、今度は日射病で倒れるというありさまである。Jeannie は、“You are captain of the ship.”¹¹ や、“I leave everything in your hands.” (MM 41) と話して Moses に頼り続ける。次第に権力を取り戻した Moses は、“I am on home territory, whereas you and Jeannie belong to the minority white groups.” (MM 76) と発言して、権力構造をうまくひっくり返してそれを相手にも認めさせる。Moses の位置づけは本作品の中で何度も変わっており、それは評価基準が変わるたびに影響を受けている。例えば先述した通り、Moses はトリニダードという領域ではその人種ゆえにマジョリティになるが、トリニダードに向かう船の上ではその人種ゆえにマイノリティになる。しかも、三等キャビンの船室に居合わせた四人の男たちとの関係を見て行くと、この権力構造がさらに複雑な様相を呈していることに気づく。例えば、長らくロンドンで生活した Moses はウェールズ人の Walter に親近感を持ち、彼の手を強く握りしめて仲間意識を倍増させる。Moses は生活基盤ゆえに、自分は英国側に属しているという自負があるが、彼の思いとは裏腹にトリニダード出身の Owen やドミニカ出身の Dominica は外見的な特徴から Moses に親近感を持ち、妙に馴れ馴れしい。彼らとは違うと考えている Moses は気分を害し、がさつな Dominica には特にうんざりして、叱責する。

ただ彼の中には、それをうまく使い分けることでコミュニティの一員として機能しようとする意識もある。三等キャビンに泊まる Moses は、そう簡単に Bob の様子を見に一等キャビンに入ることができない。Moses は一等キャビンに通じるデッキに見張りが待機していること、そこには越えられない境界 (barrier) があることを認識している。また Bob や Jeannie と一緒に一等キャビンで食事をする時にも、“I [Jeannie] informed them that you were our chauffeur and handyman. You don't mind?” (MM 46) と尋ねられ、そのコミュニティにおいてもっとも混乱をきたさない位置づけに身を置く。前作までとは異なり、Moses は Owen や Dominic のような移民から仲間意識を持たれることを拒絶する一方、自ら社会的地位を下げてその場を丸く収める柔軟さを身につけている。

4-2. 埋まらないギャップと共有されない価値

The Lonely Londoners において、大都市への憧れが強い Big City は、“Come to think of it is a good idea to go back like a lord and let all them bitches see how much money I have.” (LL 87) と述べる。これは主として、植民地で活動をした宗主国の人間が故郷に戻るときに考えていたことで、「植民地帰り」に付随する権力を振りかざす時に特徴的な態度である。しかし Big City の場合、ロンドンからジャマイカに戻る設定になるため、

「植民地帰り」とは逆方向への動きを見せるが、自負心の強さは共通している。Moses も同様にロンドンからトリニダードに帰るわけだが、予想に反して彼は歓待を受けるどころか嘲笑的になる。トリニダードに帰った彼は、宿泊先のホテル (Hilton) にタクシーを向かわせるが、その行き方を説明する途中でタクシーの運転手から、“You must of been away a long time, bach,” (MM 59) と言われて黙り込む。同様に、思い出の飲み物 (mauby) を探しに出かけた時にも、“Mauby! We don't sell mauby, mister.” (MM 80) と言われ、バイトの少女たちに笑われる。その上、「コーラかペプシにしませんか」とどこにでもある飲み物を勧められ、Moses はローカルなものにありつけない。

Moses の身の上話はこの三作目でようやく明かされ、彼が籠に入れて捨てられていた孤児で、Flora おばさんに拾われて育てられたことがわかる (MM 61)。そのおばさんに再会する場面は感動的なものであるはずだが、おばさんは彼のことを全く覚えていない。“You don't remember Moses who went to England to make his fortune?” (MM 63) と問われてようやく思い出すが、皮肉なことに故郷のミカン農園で細々と農業を続けていたおばは、宝くじを当てて家を改築し、Moses の助けを必要としない程度でそれなりの生活を送っている。また Flora と同居している Doris は Moses と同じ身の上の少女だが、彼女は Moses を憧れのまなざしで見ることがない。Moses がトリニダードを離れていたおよそ 30 年の間、そこにいた人たちにも同じ 30 年という時間が流れており、それによって人々の価値観も大きく変化して。しかし Moses はその点に思いが至らないため、時間的ギャップとそれに付随する変化に対応することができない。

Moses は過去とのつながりを求め、そのたびに肩透かしを食う。昔の友人に会うことはかなわず、歩き慣れた道は無くなっているか、当時とは違う場所につながっており、住空間も大きく変貌している。おばの家に向かった Moses は、“there was changes, a lot of the hovels was replaced with bungalows, and the roads was not so rocky, and there was electricity and running water for those who could afford it. . . There was improvements in the old dwelling” (MM 86) と語って、「変化」と「改善」を同義に捉えて肯定的に受け入れるが、その表現が何であれ過去の面影を失っている以上、Moses は過去と現在をつなぐ足場を固めることができない。“it was as if out here by the Savannah I lose my identity and become prey to incidents and accidents” (MM 65) が言い表す通り、Moses はトリニダードとロンドンに存在する自分の影を探しに来ていながら、自分のアイデンティティを確認できずにいる。

Moses 以上に過去との連続性を求めるのが、同行した Bob である。イングランド人の彼はトリニダードに自分の先祖がいると聞いて、先祖探しに躍起になる。一方、Moses は先祖を探すことに価値を見出せず、過剰に過去にこだわる彼と仲たがいをする。結局、イングランドに戻る直前に Bob は先祖のことを知るチャンスに恵まれるが、“Somewhere in the past one of my forebears committed an unforgivable act.” (MM 175) と話して、がっくり肩を落とす。「海賊か？それとも奴隷商人か？」という Moses の間に対して、Bob は、自分の先祖に黒人と関係を持ち、子どもをもうけた人がいたことを明かす (MM 176)。

過去への感謝があるか否か、それが“being civilized and primitive” (MM 130) を分ける決め手だと言っていた Bob は、過去への感謝どころか、ろくでもない過去につながってしまった事実で失望し、先祖探しをしたことを後悔する。

Moses も過去との連続性を求めたふしはあるが、彼の場合は Bob と態度が異なっている。それを端的に表すのが、トリニダードのカーニバルで行われた仮装大会である。山本伸は『カリブ文学研究入門』の中で、Earl Lovelace (1935-) の *The Dragon Can't Dance* (1979) を分析し、カーニバルにおけるマスカレードは「自分たちが本来あるべき姿に戻る」ために重要な要素で、キリスト教化によって失った尊厳を取り戻そうと、「<客体>化された精神を<主体>化する<機会>を提供する<場所>だ」¹²と述べる。*Moses Migrating* で Moses が返るべきだと考えた場所は、Lovelace が定めたアフリカ（マリ、ギニア、ベナン、コンゴ）ではなく、ブリタニアである。当時トリニダードでは、ポンドが暴落してアメリカドルしか信用できないという意識 (MM 67)、イングランドにはジャガイモがないという話 (MM 70)、イングランドは経済的に破綻しているという話 (MM 73) が蔓延しており、人々の意識の中でイングランドが弱体化しつつあった。Moses は Jeannie が趣味で集めているコインを見ているうちに、イングランド硬貨に描かれる Britannia に扮してこれらの噂を断ち切り、イングランドは未だ健在であると示すことこそが自分の使命だと信じる。取材にあっていた新聞記者の Lennard が、“Britannia should be white and feminine to be authentic.” (MM 113-14) と話すが、Moses は「本物らしさ」を求めておらず、日常の価値秩序が転倒し、性や人種、社会階級が混沌とした祝祭空間において、自分だからこそできる役割を見出す。そのうえで Flora おばさん、Doris、そしてイングランドからやってきた仲間たちに協力を仰ぎ、彼らと一緒に様々な要素が入り混じった Britannia を完成させる。このいわゆる「コスプレ」は好評を博し、Moses はその年の大会で一等賞を獲得し、副賞としてシルバーカップと賞金 100 ドル（100 ポンドではない）を獲得する。

Moses はその後、自分自身の帰る場所を思案し、彼がいるべき場所はトリニダードではなくロンドンだという結論にたどりつく。しかしロンドンに戻った Moses が最初にしなければならないことは Immigration の列に並ぶことで、Moses の気持ちとは裏腹に、彼を取り巻く社会システムは彼をそう易々と受け入れてはくれない。Moses は審査の際に、黒人プロテニスプレーヤー Arthur Ashe (1943-93) をまねて、コスプレ大会で勝ち取った優勝杯をまるで聖杯 (Holy Grail) であるかのように高々と持ち上げ、“I have this to declare” (MM 179) と叫ぶ。しかし入国審査の係員はそれに対して、“That's quite all right” (MM 179) とだけ答え、Moses は恥ずかしい思いをする。Britannia の恰好をした Moses はトリニダードでもてはやされて優勝杯を手に入れたが、その価値はイングランドで共有されることがない。Moses はロンドンでも故郷のトリニダードでも所属意識を持ってない放浪者となり、妙なコスプレで勝ち取った優勝杯を片手になかなか現実に戻れないでいるのだ。

5. 結論

本稿では、Sam Selvon の「Moses 三部作」をもとにして、主人公 Moses Aloetta やその他の移民が直面した差別や偏見、複雑化するマイノリティと世代間の価値観のズレ、故郷に戻った移民者が直面する新たな問題などについて考察した。移民の問題は現代社会における喫緊の課題であるが、議論するにしても彼らを外側から眺めることが多い。しかし Selvon の場合、彼自身が移民であったこともあり、その視点は常に移民の中に定まっている。しかもその視線の先にあるのは、必ずしも悲劇的な人生ばかりではなく、登場人物一人ひとりの個性や生き方が愛情を持って描かれ、読者の目の前に形を持って現れる。

Selvon はその後、1978 年に 55 歳でカナダに移住し、そこでクリエイティブ・ライティングの指導を行っている。あるインタビューで、「なぜ、トリニダードを選ばなかったのか」と問われると、彼はこう答えている。“I wanted to get back into the Western hemisphere, because I had lived so long in England and inculcated English literary values and tradition and custom and so on. I felt that I was born in the West and I ought to get back into the Western way of life.”¹³ 西洋化された社会・教育システムの中で育った彼にとって、トリニダードで過ごした 27 年は「イングランド的な価値観に浸った 27 年」でもあるし、「ロンドンに行くための 27 年」だったともいえる。インタビューの中で二度繰り返された「帰る」(“get back”) という言葉は、トリニダードではなく西洋に結びついており、彼が西洋的価値観に居心地の良さを感じていたであろうことは想像に難くない。Sam Selvon の場合は、西洋的価値観を美化するスタンスはとっておらず、比較的中立な立場にいるが、この価値観は作家によって大きく異なる点に留意しなければならない。

現在の英文学は、かつてのように英米の枠組みにはめるのが困難な状況にある。本稿で取り上げた Sam Selvon のように、植民地や第三国からイングランドに移り住み、そこで新たな人生を切り開いた人たちがいた。言葉の壁や、差別と偏見に直面しながらも「第一世代」はそこで子孫を増やす。次の「第二世代」は、親と同じような苦労を強いられるか、あるいはイングランドで教育を受けてある程度恵まれた環境で生活しているかのどちらかに分かれる。自分を取り巻く環境がどのようなものであったか、それに合わせて移民の中で作られるイングランド像は大きく異なる。Sam Selvon や彼と同じ船に乗り合わせた George Lamming (1927-)、ジャマイカからロンドンへの移民 Victor Headley (1959-)、Selvon と同じくトリニダードからロンドンへ移った V. S. Naipaul (1932-)、キッツ島からヨークシャーに移った Caryl Phillips (1958-) といった「第一世代」や Andrea Levy や Zadie Smith (1975-) ら「第二世代」がたどった運命と、それに基づくイングランド表象はどのような違いがあるのだろうか。「ウィンドラッシュ世代」に限らず、移住を経験した作家たちは自分たちの過去をどのように書き残すのか、今後もこの課題に取り組んでいきたい。

注

1. *Oxford Companion to Black British History* の“Empire Windrush”の項目 (155-156) を参照した。ここには以下のような説明がつけられている。“An advertisement was placed in the *Daily Gleaner* newspaper to say that 300 passage berths to England would be available for the sum of £28 10s. each. Because of the depressed economic situation that existed in Jamaica at that time, there was great competition for these very limited places.” (155)
2. Empire Windrush の報道については、次の2つのメディアを参照した。1つは BBC World Service の“Witness” (<https://www.youtube.com/watch?v=DImwW9TrOE>) で、もう1つが当時のニュース映像 (<https://www.youtube.com/watch?v=9F6lsLRdZ-o>) である。前者には Empire Windrush の乗客で、後に黒人として初めてロンドン・サザビー地区の市長になった Sam Beaver King (1926-2016) のインタビューが収録されており、後者では背広姿の男性たちが確認できる。
3. 本稿では Empire Windrush に実際に乗船した人たちだけでなく、同時代に移住した人たち、また小説内でその時代に移住した登場人物たちなども総称的に「ウィンドラッシュ世代」と呼ぶことにする。
4. Fabre 66.
5. イングランドに上陸した直後に受けたインタビューで、彼は“London is the Place for Me”をその場で披露している。Kitchener はイングランドに14年暮らし、1962年にトリニダードに帰国して1999年まで歌手活動を続け、翌年に死去している。「第二世代」にあたる彼の息子 Kernel Roberts (1980-) も歌手で、ソカ（ソウルミュージックとカリプソが融合した音楽）のプロデューサー兼シンガーソングライターとして活躍中である。
6. *The Lonely Londoners* 21. 以下、本稿での引用は Penguin 版によるものとし、引用の際には丸括弧内にタイトルの略語 (LL) とページ数を示す。
7. Levy 2.
8. *Moses Ascending* 37-38. 以下、本稿での引用は Penguin 版によるものとし、引用の際には丸括弧内にタイトルの略語 (MA) とページ数を示す。
9. この点に関しては、Chakraborty 54 および Tiffin 143-163 を参照した。
10. Thieme and Dotti 77.
11. *Moses Migrating* 41. 以下、本稿での引用は Longman 版によるものとし、引用の際には丸括弧内にタイトルの略語 (MM) とページ数を示す。
12. 山本 158-59.
13. Thieme and Dotti 73.

参考文献

- Chakraborty, Chandrima. "Interrupting the Canon: Samuel Selvon's Postcolonial Revision of *Robinson Crusoe*." *ARIEL* 34.4 (2003) : 51-72. Print.
- Dabydeen, David, Johnn Gilmore, and Cecily Jones, eds. *Oxford Companion to Black British History*. Oxford: Oxford UP, 2007. Print.
- Eagleton, Robert. *Contemporary Fiction: A Very Short Introduction*. Oxford: Oxford UP, 2013. Print.
- Fabre, Michel. "Samuel Selvon: Interviews and Conversations." *Critical Perspectives on Sam Selvon*. Ed. Susheila Nasta. Washington: Three Continents Press, 1988. 64-76. Print.
- Klimová, Zuzana. "Language as a Mirror of Cultural Syncretism and Hybridity." *Theory & Practice in English Studies* 6.2 (2013) : 93-103. Print.
- Levy, Andrea. *The Long Song*. London: Headline, 2010. Print.
- Liu, Tingxuan. "Hybridization in Political Civilization in Samuel Selvon's *The Lonely Londoners* and *Moses Ascending*." *Theory and Practice in Language Studies* 6.5 (2016) : 1006-1010. Print.
- Salick, Roydon. *Samuel Selvon: Writers and Their Work*. Devon: Northcote House Publishers, 2013. Print.
- Selvon, Sam. *The Lonely Londoners*. 1956. London: Penguin, 2006. Print.
- *Moses Ascending*. 1975. London: Penguin, 2008. Print.
- *Moses Migrating*. Suffolk: Longman, 1983. Print.
- Thieme, John and Alessandra Dotti. "'Oldtalk': Two Interviews with Sam Selvon." *Caribana* 1 (1990) : 71-84. Print.
- Tiffin, Helen. "Plato's Cave: Educational and Critical Practices." *New National and Post-colonial Literatures: An Introduction*. Ed. Bruce King. Oxford: Clarendon, 1996. 143-163. Print.
- Williams, Eric. *From Columbus to Castro: The History of the Caribbean 1492-1969*. New York: Vintage, 1984. Print.
- Young, Robert J. C. *Postcolonialism: A Very Short Introduction*. Oxford: Oxford UP, 2003. Print.
- 木村茂雄編. 『ポストコロニアル文学の現在』. 晃洋書房, 2004年.
- 山本伸. 『カリブ文学研究入門』. 世界思想社, 2004年.